同族目的語構文と軽動詞構文*

北　原　賢　一

1. はじめに

現代英語における同族目的語構文は、しばしば軽動詞構文との間に類似性や関連性があると論じられてきた (Fillmore (1968), Quirk et al. (1985), Kearns (1988), Macfarland (1995), Huddleston and Pullum (2002), Mirto (2007))。しかしながら、Kitahara (2010) や北原 (2011b) で明らかにされてきたように、同族目的語構文は大きく分けて二つの構文型からなる複合的なカテゴリーであり、それぞれの構文型に固有の統語的・意味的特質がある。先行研究が軽動詞構文と関連付けようとするいわゆる「同族目的語構文」は、その構文集合の一タイプに過ぎず、またその統語的・意味的特質も軽動詞構文のそれとは明らかに異質である。

本論文の目的は、同族目的語構文と軽動詞構文には何の関係もなく、両構文に派生関係を求め、一つの構文グループとして扱うかのような分析は根本的に間違っていることを指摘し、両構文の統語的・意味的特質を明確にしながら、それぞれの構文に関する正確な言語記述の方向性を示すことにある。

2. 先行研究——同族目的語構文と軽動詞構文は派生関係にある

従来、同族目的語構文と軽動詞構文の間には、いくつかの類似性があることが指摘されてきた。「軽動詞 (light verb)」という名称は、Otto Jespersen によるもので (Jespersen (1942))、意味的に軽い動詞 (*take*, *have*, *give*, *make*) に人称・時制を担わせ、目的語位置にくる名詞によって意味的により重要な情報

* 本論文は、Kitahara (2010) の第 6 章の議論を基にしたものである。

を表わすという当該構文の意味特徴をとらえた名称といえる。

(1) a. She has a great laugh.
b. He had a lovely smile.

(BNC)

(1) の事例に見られるように、主語による実際の行動を明確に述べているのは目的語位置にくる名詞であり、動詞 *have* は人称・時制を担うだけで、たしかに意味内容としては希薄に感じられる。[1]

興味深いことに、軽動詞構文に用いられる名詞は、同族目的語構文でも用いられることがある。[2]

(2) a. They fought a long fight.
b. They had a long fight.

(Quirk et al. 1985: 751)

(3) a. Marcy dreamt a wonderful dream.
b. Marcy had a wonderful dream.

(Höche 2009: 231)

(2) と (3) を比べてみると、それぞれの表現の補部は主動詞が表わす出来事を概念的により詳細に記述、精緻化している。たとえば、 (2a) ならば、*fight* といっても単なる *fight* ではなく *a long fight* であり、(2b) ならば、*have* という漠然とした意味の動詞から、さらに細かく意味内容を精緻化する形で *a long fight* という要素が後続している。ここから言えることは、同族目的語構文も

---

[1] これは、英語に対応する日本語の軽動詞構文が、たとえば「ひと笑いする」のように、「する」を意味の薄い支持動詞として用いることからもうなずけよう (cf. 影山 (1996))。

[2] Höche (2009) による BNC コーパスの調査によれば、同族目的語構文で用いられる名詞の多くが軽動詞構文でも用いられるという。(i) は、同族目的語構文と軽動詞構文の両方に生起する名詞の例である。

(i) bite; breath; cough; cry; dance; dream; drink; feeling; fight; grin; jump; laugh; prayer; run; scream; sigh; sleep; smell; smile; talk; taste; thought; walk

(Höche 2009: 232)

Höche はさらに、これらの動詞の出現頻度についても調査を行っている。詳しくは、Höche (2009) を参照されたい。

軽動詞構文も、動詞とその動詞に後続する名詞要素が、主動詞の表わす出来事をより具体的に叙述する関係にあるということである。このような意味の類似性により、軽動詞構文は (4) のように意味的に等価な同族目的語構文にパラフレーズできるという。

(4) a. The two boxers fought a ferocious fight.
b. The two boxers had a ferocious fight.
c. The two boxers fought ferociously.

(Mirto 2007: 4)

Mirto (2007) によれば、(4a) は (4b) の変種であり、(4a) における名詞句 *a ferocious fight* は述語名詞を含んでおり、主動詞 *fought* はそれと同形・同語源の支持動詞にすぎないという。[3] そして、(4a) は、(4b)、(4c) と同一の意味を表わすという。Mirto は同族目的語構文を軽動詞構文、動作表現構文 (e.g. *She smiled her assent*.) とともに、支持動詞構文（supportive verb constructions）という構文グループを形成する構文であると主張している。

さらに、軽動詞構文と同族目的語構文は統語的にも類似性を示すという。Kearns (1988) や Dixon (2005) が指摘するように、軽動詞構文の補部は対応する受動文の主語になることができない。

(5) a. * A groan was given by the man on the right. (Kearns 1988: 5)
b. * A swim (in the pool) was has/taken.
c. * A push was given Mary.

(Dixon 2005: 468)

[3] Mirto (2007) によれば、決定詞の種類と分布も軽動詞補部の述語性を示唆しているという。Huddleston and Pullum (2002) が指摘するように、軽動詞と用いられるもっとも一般的な決定詞は不定冠詞であり、これは Higginbotham (1987) の「叙述名詞は不定性効果を示す」という観点に通じるものである。Brinton (1996) は、動詞に後続する名詞は一般的に不定冠詞が先行すると指摘しており、また Cobuild コーパスの調査によれば、同族目的語はその 4 分の 3 が無冠詞か不定冠詞とともに用いられるという(7.7 % + 65.4%) (Rymen (1999), Davidse and Rymen (2006))。しかしながら、後述するように、これは全ての同族目的語が叙述名詞であることを示すものではない。

また、Kearns は、軽動詞構文の補部は指示性を持った名詞句ではなく、述語名詞であり、関係節による修飾や代名詞による代用を許さず、不定性効果を示すと論じている。

(6) a. ?? The groan (which) he gave startled me.
b. ?? The deceased gave a groan at around midnight, and gave *another one* just after two.
c. * Who gave *the* groan just now?

(Kearns 1988: 6)

たしかに、同族目的語構文も、受動化を許さず、指示性を持たず、不定性効果を示すことが指摘されてきた。

(7) a. * An uneventful life was lived by Harry (Jones 1988: 91)
b. ?* Mary danced a staggering/nervous dance, and *it* was noticeable.
(Horita 1996: 249)
c. * John screamed *this* scream/*every* scream we heard today.
(Moltmann 1989: 301)

(7) に見られるように、同族目的語は受動化できず、指示代名詞 it によって代用することが許されず、定性効果を示さないことがわかる。

以上のような同族目的語構文と軽動詞構文の類似性を踏まえ、Fillmore (1968) は、両構文は基底に同族目的語を持つ構文であり、軽動詞構文は同族目的語構文から派生される関係にあると主張する。Fillmore の提案する派生関係は次のようなものである。まず、名詞目的語がダミーとして動詞をコピーする形で挿入され、同族目的語形式を作り出す (e.g. *dream* + Ø → *dream* + *dream*). 結果として生じた名詞句には作為格 (factitive case) が付与される。続いて、もともとの動詞はダミーの動詞 (pro-V) で代替され、作為格を持った名詞句を伴う軽動詞構文が最終的に派生されると提案するのである (e.g. *dream* + *dream* → *have* + *dream*)。Mirto とは派生関係が逆ではあるが、いずれの分析も両構文を派生関係で捉えようとしていることに大きな違いはない。

3. 同族目的語構文と軽動詞構文は派生関係にはない

同族目的語構文を軽動詞構文と同じカテゴリーとして扱う、あるいは派生関係にあると分析する議論は、そもそも現代英語の同族目的語構文の特質をとらえきれていないように思われる。

第一に、同族目的語構文と軽動詞構文とでは出現頻度と使用域に大きな違いがある。軽動詞構文は同族目的語構文と比べて自然言語でずっと頻繁に用いられる。Dixon (2005) はもっとも一般的な英語動詞のうち約 700 個を詳細に調べた結果、そのうちの約 25 パーセントが HAVE A VERB (e.g. *have a romantic smile*)、TAKE A VERB (e.g. *take a long walk*)、GIVE A VERB (e.g. *give an embarrassed cough*) のいずれかのタイプに生起すると報告している。[4] Dixon の調査によれば、これらの形式はいずれも親近感や親密さ (friendliness and intimacy) を含意する形で用いられ、口語英語での使用がより頻繁であるという。しかしながら、同族目的語構文は違う。伝統的に同族目的語構文は文体的に仰々しいスタイルであり (Quirk et al. (1985))、一般的にはフォーマルな場面や文語で用いられることが多い。Osaki (2000) が指摘しているように、英語の同族目的語は古英語の時代に頭韻の埋め草として冗語的に用いられた。その名残は現代英語にも残っており、同族目的語構文は詩や小説のような文学作品に多く現れる。

(8) On Nicholas stopping to salute them, *Mr Lenville laughed a scornful laugh*, and made some general remark touching the natural history of puppies. (Charles Dickens, *Nicholas Nickleby*)

(9) Johnnie looked hopefully at his father; he knew that shoulder was tender from an old fall; and indeed it appeared for a moment as if Scully was going to flame out over the matter, but in the end *he smiled a sickly smile* and remained silent.
(Stephen Crane, *The Blue Hotel*)

(10) ‘Mr. Rochester, if ever *I did a good deed* in my life – if ever *I thought a good thought* – if ever *I prayed a sincere and blameless prayer* – if ever *I wished a righteous wish*, – I am rewarded now. To

[4] DO A VERB type (e.g. *They did a slow dance*.) については、Höche (2009) を参照されたい。

be your wife is, for me, to be happy as I can be on earth.'

(Charlotte Brontë, *Jane Eyre*)

(11) But she joined in the forfeits, and *loved her love* to admiration with all letters of the alphabet. (Charles Dickens, *A Christmas Carol*)

(12) He smelled the tar and oakum of the deck as he slept and *he smelled the smell of Africa* that the land breeze brought at morning.

(Ernest Hemingway, *The Old Man & the Sea*)

このような同族目的語構文の在り様は、Dixon の調査した軽動詞構文のそれとは異なるものであろう。

第二に、動詞とその目的語の意味について調べてみると、軽動詞構文と同族目的語構文はまったく違うメカニズムで成り立っていることがわかる。軽動詞構文では、動詞後続の名詞がもともと動詞であったときの概念内容を保持する一方で、代替されている軽動詞は描写されている出来事が進行する様を伝えるに過ぎない。しかしながら、同族目的語構文の場合には、目的語は動詞の意味概念を繰り返すために、話者が動詞によって表されている出来事をどのように解釈するかに応じて、全く異なる統語的・意味的特徴を示す。Rice (1987) によれば、同族目的語には、単純に事象を表す場合と事象が集まってまとまりをなした場合、一回きりの動作行為から独立して存在する既存のタイプを表す場合とがあるという。その証拠に、Langacker (1991) が指摘しているように、前者の場合には受動化を容認せず ((13a))、後者の場合には受動化を容認するという違いがある ((13b))。

(13) a. ?*A blood-curdling scream was screamed by one of the campers.

b. The blood-curdling scream that they had all heard in countless horror movies was screamed by one of the campers.

(Langacker 1991: 363)

(13a) が容認されにくいのに対して、(13b) のようにホラー映画で耳にする悲鳴のような典型的なタイプが表される場合には受動化が問題なく容認されることに着目したい。このような scream の相反する統語的振る舞いは、そのまま意味の違いに反映される。(14) を見てみよう。

(14)　Mary danced a beautiful dance.

A: メアリーの踊りぶりが優美であった。

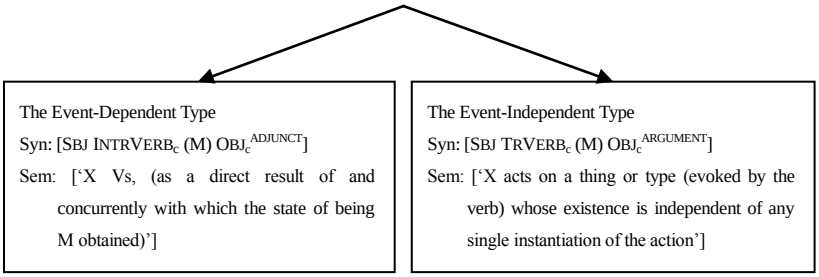
B: メアリーの踊りが優美な結果となった。

C: メアリーの踊った舞踊の種類が優美なもの（例えばワルツ）であった。

(中島・池内 2005: 183; cf. Matsumoto 1996: 214)

(14A) では、舞踊の動作・プロセスに焦点を当てられており、同族目的語内の形容詞（あるいはそれを含む同族目的語全体）が様態副詞の働きをしている。また、(14B) では舞踊の初めから終わりまでを一まとまりとして捉え、同族目的語を舞踊の結果と見なしている。ところが、(14C) では、同族目的語の代わりに waltz や tango など形態的に同族目的語と直接関係のない、舞踊の種類を表す名詞句を用いることができる。(14A)、(14B) のような解釈の場合、同族目的語は副詞的同族目的語として機能し、(14C) のような解釈の場合には、名詞的同族目的語として機能する。いわば、同族目的語はそれを用いる話者の出来事の解釈に応じて、動詞が表す事象を反復するだけの「事象依存型 (the event-dependent type)」と事象から独立したものを指示する「事象独立型 (the event-independent type)」の二通りに分かれうるのである (Kitahara (2010), 北原 (2011b))。

(15)　COGNATE OBJECT CONSTRUCTION



(北原 2011b: 73)

軽動詞構文との類似性が指摘されるいわゆる「同族目的語構文」は、同族

目的語構文の二面性の一つを捉えたものに過ぎず、表面的なレベルで両構文の統語的・意味的特徴を比較しているに過ぎないことになる。すなわち、2節で見た、1) 受動化が容認されない、2) 様態副詞による書き換えが可能である、3) 指示代名詞による代用ができない、4) 不定性効果を示す、といった特徴は、「事象依存型」の同族目的語の場合に限られる特徴なのである。[5, 6] これらの統語的特徴は、構文が独自に担う意味を反映するものであり、このような言語事実を無視した単純比較は構文の正確な言語記述とは言えず、まして両構文の派生関係を考えるような議論は百害あって一利なしと言えよう。

4. 軽動詞構文の機能的・意味的特徴

一般に、軽動詞構文は弁別的な意味特性をそなえた構文群からなるカテゴリーである (Wierzbicka (1982), Kearns (1988), Dixon (2005), Höche (2009))。均質的ではなく、個々に固有の特徴を持った「構文の家族 (a family of constructions」を形成するのは同族目的語構文と同じだが、それぞれの構文型が持つ機能的・意味的特徴は同族目的語構文とは異なるものである。

---

[5] 不定性効果を示す、という議論には次のような反論もあるかもしれない。先行研究では同族目的語が必ずしも不定性効果を示さないことが指摘されているからである。

(i) a. She smiled her sarcastic smile.
b. Diane Keaton smiles that infinitely fetching smile and elucidates:
"But you know, mean, I say, hey, look, year, O.K." (Macfarland 1995: 21)

しかしながら、上のような例は注意を要する。同族目的語が定性効果を示すのは名詞的同族目的語として機能する場合に限られ、副詞的同族目的語として機能する場合にはやはり叙述名詞としての不定性効果を示すからである。

(ii) a. Sam danced {the/every} beautiful dance.
≠Sam danced beautifully.
b. Sam smiled {the/every} beautiful smile.
≠Sam smiled beautifully.

(Kitahara 2011a: 33)

定性効果を示す場合には、副詞による言い換えができないことに注目されたい。

[6] 全ての同族目的語構文がどちらの構文型にも解釈されるわけではない。たとえば、4節で見る非対格動詞の生起する同族目的語構文は、事象依存型としての解釈しか存在しない。このことは、生起する動詞の種類ごとに構文の特性が変わることを意味し、構文レベルでの単純比較によって、類似性や関連性を主張する議論そのものが、言語の複雑性を捉えていないことを意味する (Kitahara (2010, 2011a), 北原 (2011b); cf. Iwata (2006, 2008))。

まず、HAVE A VERB タイプについて考えてみよう。Dixon (2005) によれば、HAVE A VERB を使った場合と単純動詞を使った場合とでは、アスペクトの性質に違いがある。HAVE A VERB タイプは主語が一定期間気ままに振る舞う活動を強調する構文型である。たとえば、*have a walk* とか *have a swim* と言えば、その表わすところは主語がどこかへ辿り着くために歩く、あるいは泳ぐことではない。*I had a walk in the garden after lunch yesterday.* とは言えても、*I had a walk in the garden from dawn until dusk yesterday.* とは言わないのである (Dixon (2005: 469))。このような特徴は同族目的語構文には観察されないものである。

さらに、HAVE A VERB タイプでは、主語が有性で意図的な行為を表わさなければならない。

(16) a. That child had a roll down the grassy bank.
b. * That stone had a roll down the grassy bank.

(Dixon 2005: 469)

対照的に、同族目的語構文（事象依存型）には、動詞が表わす事象が意図的であるかとか、主語が有性でなければならないなどという決まりはない。

(17) a. Crime in London has dropped the highest drop in twenty years.
b. It thundered the loudest thunder.

以上のような言語事実は、軽動詞構文の機能的・意味的特徴が同族目的語構文のそれとは一致していないことを示すものである。

次に、GIVE A VERB タイプについて考えてみよう。この構文型は主動詞 *give* がもたらす意味から、しばしば二重目的語構文を形成する。

(18) a. *My boss gave me a sweet and encouraging smile*, balanced a mushroom on a piece of fried bread and conveyed it to his mouth.
b. Josie fluffed out some of the tail-feathers on a costume for the upcoming number, and *gave the matter some thought*.

(BNC)

(18a, b) では、動詞由来の名詞 *smile, thought* に、行為の手段ないし利益を被る対象を指示する名詞 *me, the matter* が先行している (Höche (2009: 243))。Höche は、同族目的語構文も二重目的語構文と融合するとして、次のような例を挙げている。

(19) a. Diana looked thoughtful as Bruce took her hands in his, *she smiled him a smile* that conveyed all her feelings of love and affection for him. (インターネットからの用例; Höche 2009: 268)

b. *Prayed them a prayer*, gave them a key I wanted to spread the joy that had overfilled my spirit.

(インターネットからの用例; Höche 2009: 268)

Zhou (1999) も次のような事例が可能だとしているが、問題はこれらの事例が母語話者にとってどれだけ一般的かということである。

(20) a. She walloped him a wallope.

b. He laughed me a hearty laugh.

(Zhou 1999: 282)

実際、Zhou は (19) や (20) のような事例は英語ではかなり限られていることを指摘しており、GIVE A VERB タイプとの単純比較はこのインターネットの用例だけではかなり難しいものと思われる。

最後に、TAKE A VERB タイプの意味機能について考えてみよう。Dixon が論じているように、TAKE A VERB タイプはイギリス英語でも使用にかなりの制限があり、HAVE A VERB タイプに生起する動詞の一部がこの構文型に現れる。そして、TAKE A VERB タイプと HAVE A VERB タイプにははっきりとした意味の違いがある。一つ目の違いは、主語に責任がある身体的労力がかかっているかどうか、という違いである。具体的に言えば、*A baby's having a bath.* とは言えても、*A baby's taking a bath.* とは言えない (cf. Quirk et al. (1985))。何故ならば、後者は、赤ん坊がひとりで風呂に入ることを含意するからである (Höche (2009: 247))。赤ん坊は当然ながらひとりで風呂に入ることはでき

ない。TAKE A VERB タイプでは、行為の主導権をとらない主語は許されないのである。

もう一つの違いは、アスペクトに関わるものである。Wierzbicka (1982) によれば、TAKE A VERB タイプは行為の始まりと終わりが明確な単一の行為を表わすが、HAVE A VERB タイプは恣意的な活動の連鎖を表わすという。

(21) a. I breathe a deep breath and try to relax.
b. I take a deep breath and try to relax.

(Höche 2009: 248)

Höche によれば、(21a) は呼吸に際して、息を吸うのか、吐くのか、あるいはその両者を意味するのかが曖昧であるという。しかしながら、(21b) では呼吸は吸うことに限られ、主語である I はその吸いこまれた空気の受け手（つまり、終着点）として機能するという。(21a) に見られるようなアスペクトに関する同族目的語構文の曖昧さは、(14A, B) で見た二通りの解釈にも反映されているだけでなく、(22) のように for 句と in 句の両方が可能であることからも裏付けられよう。

(22) a. Mary laughed a mirthless laugh {for an hour/in an hour}.
b. Josie danced a silly dance {for an hour/in an hour}.
c. Martha sang a joyful song {for an hour/in an hour}.

(Nakajima 2006: 680)

(22) では、どの同族目的語構文も non-delimited reading も delimited reading も許すことに着目されたい。

以上の議論から、同族目的語構文を軽動詞構文と同じカテゴリーに扱うことには無理があることがわかる。それは、結果として同族目的語構文を軽動詞構文でパラフレーズするような議論自体がそもそも間違っていることを意味しているのである。

5. まとめ

本論文での分析を通して、同族目的語構文と軽動詞構文の間には、先行研

究が主張するような類似性や関連性は存在せず、両構文に派生関係を求め、一つの構文グループとして扱うかのような分析が根本的に間違っているのみならず、両構文が統語的・意味的に持っている本来の特質をも見失いかねないものであることが明らかになった。それぞれの構文に関する正確な言語記述を行うためには、母語話者による内省調査やコーパスを用いることも大切だが、構文が独自に担う機能的・意味的特質を捉える分析が必要となるだろう。そのためには、言語の基本単位として「構文」を認め、構文がしばしば示す言語の複雑さを受け入れるアプローチ、すなわち構文的アプローチが不可欠となろう。

参考文献

Brinton, L. J. 1996. “Attitudes toward Increasing Segmentalization: Complex and Phrasal Verbs in English,” *Journal of English Linguistics* 24-3, 186-205.

Davidse, K. and K. Rymen. 2006. “Cognate Complements and Bare Locative Complements: Subclassifying/Bounding Effect and Relation to the Process,” handout delivered at the XXV International Conference Lexis & Grammar, Palermo, 6-10 September.

Dixon, R. M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford: Oxford University Press.

Fillmore, C. J. 1968. “The Case for Case,” *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Emmon Bach and Robert T. Harms, 1-88, New York: Holt, Reinehart, and Winston.

Higginbotham, J. 1987. “Indefiniteness and Predication,” *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric Reuland and Alice ter Meulen, 43-70, Cambridge, MA: MIT Press.

Horita, Y. 1996. “English Cognate Object Constructions and Their Transitivity,” *English Linguistics* 13, 221-247.

Höche, S. 2009. *Cognate Object Constructions in English*: *A Cognitive-Linguistic Account*, Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.

Iwata, S. 2006. “Where Do Constructions Come From?” (Review Article: *Radical Construction Grammar*, by William Croft, Oxford University Press, Oxford, 2001) *English Linguistics* 23-2, 493-533.

Iwata, S. 2008. *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part VI: Morphology*, London: George Allen and Unwin.

Jones, M. A. 1988. “Cognate Objects and the Case-Filter,” *Journal of Linguistics* 24, 89-110.

影山太郎. 1996. 『動詞意味論──言語と認知の接点──』, 東京: くろしお出版.

Kearns, K. 1988. “Light Verbs in English,” ms. http://www.ling.cantebury.ac.nz/documents/lightverbs.pdf

Kitahara, K. 2010. *English Cognate Object Constructions and Related Phenomena: A Lexical-Constructional Approach*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.

Kitahara, K. 2011a. “Cognate Object Constructions Are Not Monotransitive Constructions,” *Tsukuba English Studies* 30, 23-50.

北原賢一. 2011b. 「動詞 die と同族目的語構文──語彙・構文的アプローチによる記述的研究──」, 『英語語法文法研究』第 18 号, 63-78, 東京: 開拓社.

Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II: *Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.

Macfarland, T. 1995. *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University.

Matsumoto, M. 1996. “The Syntax and Semantics of the Cognate Object Construction,” *English Linguistics* 13, 199-220.

Mirto, I. M. 2007. “*Dream a Little Dream of Me*: Cognate Predicates in English.” http://infolingu.univ-mlv.fr/Colloques/Bonifacio/proceedings/mirto.pdf

Moltmann, F. 1989. “Nominal and Clausal Event Predicates,” *CLS* 25, 300-314.

Nakajima, H. 2006. “Adverbial Cognate Objects,” *Linguistic Inquiry* 37-4, 674-684.

中島平三・池内正幸. 2005.『明日に架ける生成文法』東京：開拓社.

Osaki, H. 2000. “The Influence of Alliteration on the Development of the Cognate Object in Old English,” *Studies in Language and Culture* 26, 79-89, Osaka University.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.

Rice, S. 1987. *Toward a Cognitive Model of Transitivity*, Doctoral dissertation, University of California, San Diego.

Rymen, K. 1999. *A Constructional Approach to Ranges: The Promoted Circumstance Range and the Cognate Object Range*, unpublished M.A. thesis, University of Leuven.

Wierzbicka, A. 1982. “Why Can You Have a Drink When You Can’t Have an Eat?” *Language* 58, 753-799.

Zhou, H. 1999. “Cognate Objects in Chinese,” *Toronto Working Papers in Linguistics* 17, 263-284.